

《がちゃん……きい》

(扉が開き、閉まる音)

扉の閉まる音が、部屋の中に重々しく響いた。

貴方とノラは、先ほどの路地裏から自分達の部屋へと戻ってきた所である。

ノラの親父であるという男は、貴方の拳が止まったのが分かると言うように、必死に路地裏から姿を消した。

追おうと思えば幾らでも追う事は出来たが、憔悴（しょうすい）し唇を噛み締め、涙で顔を汚したノラの姿がそれをさせてくれなかった。

いつもならば、家庭的な料理の香りと、不寐（ぶしつけ）ながらも明るい少女の声で満ちていたはずの部屋がやけに冷たく、息苦しかった。

ノラ

「……………あー、手大丈夫か？」

その……………少し、血が出てるみたいだし」

ノラが、ようやくといった様子で口を開く。

言われて見てみると確かによほど強く殴ったためか、返り血だけではなく、拳が傷つき貴方自身の血が垂れ、ぴちやりと地面に滴った。

ノラ

「ほら、やっぱ怪我してるじゃないか

……薬草あったろ？ 巻いてやるから、手……出せよ」

ノラはこの数日間一緒に暮らす内に覚えた、まだ慣れぬ手つきの治療を申し出る。

彼女に何を聞けばいいかまだ迷っていた貴方は、言われるままに手を出し、彼女の治療に身を任せた。

ノラ

「うあ……どんだけ力入れたんだよ。

握った拳の所、ズル剥けてるじゃねえか。

……あの、なんか……本当にごめん、ごめんな……」

《しゅる……しゅる、しゅる》

（包帯を巻く音）

謝る少女の声と、ただ治療をする布の音だけが部屋に広がる。

お互いに他に何を言えば、何と言えばいいのか分からないのだろう。

ノラも貴方も、何も言葉を作れずそのまま時間が過ぎていく。

ノラ

「……うん、終わった。

教わった通りだけど、これで大丈夫だよ……な？」

彼女の問いに、貴方は頷いて答えた。

そして、またお互いに喋る事が尽きたように沈黙が広がりそうになる。

これはもう自分が聞くしかないのだと決意した貴方は、

【詳しい話を、聞かせてくれるか？】

と、口を開いた。

ノラ

「あ……………うん。

……………はっ、へへ。

流石にもう、黙ってられる所は……………過ぎちまった、もんな」

何処か乾いた声で少女が笑う。

怪我をしたのは貴方のはずなのに、その声は何故か、まるでノラ自身がつつと傷だらけであつたかのような、そんな思いを抱かせるものであつた。

ノラ

「あのクソ野郎……………クソ親父（おやじ）はさ、昔はそりや頼れるつて感じじゃなくて気が弱い奴だつたけど……………あんな、クズじゃなかつたんだよ。

オレの頭なんかも撫でてくれて、たまに遊んでもくれて……………自信なさそうではあつたけど、構ってくれる……………うん、オレにとっては……………悪い父親（ちちおや）じゃなかつたんだ。

ママ……………いや、母親もオレの事よく叱ってたけど、それでも普通の……………普通の母親だと思ってたんだ」

《しゅる……》

(体育座りのように、膝を抱える音)

ノラ

「でもよ、ある日……親父が働いてた店の商品を積んだ馬車が、襲われたとかでさ。

オレも良く知らねえんだけど、なんか運悪く大口の商売の品だったとかって、話だよ。

んで、その損害であつという間に店が傾いたとか何とかで、親父の奴……働き口を無くしてさ」

《しやら……》

(居心地悪そうに、座る姿勢を変える音)

ノラ

「そっからは、なんか……あつという間だよ。

親父は新しい働き口を探したけど、何処も見つからなくて、オレもマ……母親も一緒に支えようってんで、頑張ってたつもりなだけどさ。

……へへ、オレその頃は自分のこと”あたし“って言ってたんだぜ？

まだ、家族一緒に頑張ろうって家事とか手伝ってよ……へへ。料理とかも、少しでも時間を親父や母親に作ってやりたくて、やってみたりとかさ！

ハハ、頑張ってたんだ……頑張ったんだけど、……なあ」

ノラ

「……ある日、母親が家から居なくなっただよ。

何かあったのかって、親父と一緒に探したんだけど見つからなくて、何日待っても帰ってこなくて……。

……そしたらさ、暫くして近所の婆どもがコソコソ話してんのが聞こえてきたんだ。

なんか……仕事を探してる時に見つけた別の若い男と、何処かに……消えちゃった、とかだよ。

ハハ……笑えるだろ？ 見捨てたんだよ、オレも親父も……最高のジョークだよな、まったくさ」

ノラ

「……そっからは、今度は親父の奴が壊れちゃった。

必死にやってた仕事探しも止めて、朝から晩まで酒を飲んで暴れるようになりやがってよ。

……オレも、オレだってショックだったけど。でも、このまま親父を放つてもおけねえし。

時間が経てば、親父だって立ち直ってくれるって思ってた……少ねえ金をやりくりして、どうにか飯とか用意してって、そうしたんだ。

そう……したんだよ？」

ノラ

「けど、けどよ……何時まで待っても、親父は、立ち直ってくれなくて……。

うっ……クソッ。

金が無くなって……どうしようもなくなって、それで、親父はオレに当たるようになって、でも無いものは無いんだからしょうがねえだろ?! だから、そう言ってよく怒鳴りあいするようになって……どんどん、どうしようもなくなって」

ノラ

「はっ……ハハ!

そんな時、珍しく出かけた親父がよ……金を、持って帰ってきやがったんだ。

”これで、美味しいものを作れ” ってよ! へへ……オレ、仕事が見つかったんだって、無邪気に、喜んで……作って、さあ……っ。

……そしたら、ぐす……う、作ってる、最中に……突然言うんだぜ?

”お前は明日から、娼館に住むことになるから準備しておけ” なんてよ……ふっ、あはは!”

ノラ

「……何、言われてんだか、分かんなくて……ぐすっ。

オレ、冗談だろって笑ったら……”どうせお前もいなくなるんだろう? だったら役に立っていなくなってくれ!” とか笑って……笑って言われて。

……気付いたら、家を抜け出して……町を一人で歩いてた。

何日かそうしてたけど金もないから飯も食えなくて、腹が減って……。

くっ……はは。

そんな時に会ったのが、おっさんだったんだよ。

あとは全部、おっさんが見たとおりさ……ふっ、はは！

なあ、それだけの話なんだ……笑えるだろ、なあ……笑えるだろ、おっさん？

は……はははは！」

全てを語り終えた少女は、止まらない涙を拭う事もなく……ただ笑っている。

ポロポロ、ポロポロと、頬を伝い滑り落ちていく涙の欠片が、少女の苦しんでいた時間そのものであったかというように……止め処なく流れ続ける。

ノラ

「なあ……おっさん？

オレ、何か間違ってたのかなあ……親父が、元に戻るって……期待しちゃ、いけなかったのかなあ？

それとも、親父の言うとおり……親孝行とでも思っ、売られてりや良かったのかなあ？

へへ、へへ……分かんない。分かんないよお……あたし、もう……何も分かんないよお……。

ただ、ただ……元気になって、欲しかった……欲しかったただけなのに、それだけだったのに……う、あ……ああ……うつ、うあああああああ  
あっつ」

《ぎゅうつ》

(強く抱きしめる音)

先ほど起こった事と、溜め込んでいた思いが喋っている内に、限界を迎えたのであろう。

零れながらも、必死に抑えていた涙が、声が、大きく弾けるように流れ出していく。

貴方は、彼女を抱きしめた。

涙と一緒に自分すら流れ出してしまうようなこの少女を、せめて……抱きとめてやりたいと、そんな思いに動かされるままに。

ノラ

「ぐす、えぐ……うつ、あ……あう、うう……うううう。

なんでえ……なんでなんだろお……えく。

……うつ、ぐす……ああ、うあ……ああああ……っ」

これは少女……ノラの家庭の問題だ。

本来ならば貴方が介入するような話ではないのかもしれない。

事実、世界中で見れば……娼館が何処にでもあるように、こんな話はよくある話なのだ。

ただ何処にでも転がっている、一つの不幸な世間話に過ぎないのであろう。

だが、貴方は……彼女に出会ってしまった。



腕の中に泣きじやくる少女は、確かに貴方の前にいて、貴方の家で料理を作り、掃除をし、……貴方の帰りを待ち、一緒に笑いながら共に暮らしくれていた少女、その人なのだ。

それを今、良くある話だからなどと言って、捨て置いて……知った事ではないと、見捨てていいものなのだろうか？

貴方が、その答えを見つくるべくじつと自分の心の中を見つめていると、泣いて気持ちの整理が少しは済んだのか……何処かすっきりしたようないや、諦めたような顔でノラが笑った。

ノラ

「ぐす……ふっ、へへ。何泣いてるんだろ、俺？ ……へへ。

ごめんなおっさん、オレが転がり込んだばかりに、変な話に巻き込まれてよ。

……ははっ、これ以上、おっさんに迷惑はかけられねえや。

オレ……オレさ、今日でもう……ここ出てくよ！

へへ、娼館つたって商品である女を無駄に虐待なんてしねえだろ？

そりや、逃げたオレは最初は相応の扱いをされるかもしれないけど……

死ぬ訳じゃ、ねえと思うから、よ。

……ふふ、ずっといたら、またおっさんの事、巻き込まうから、さ」

ノラが、笑う。

涙で赤く腫らした目を見せながら、それでも頬を持ち上げ、なんという

事はないと言うように、笑ってみせる。

けれどその瞳は、口調とは裏腹にランプの光の中、不安気揺れ続けた。

ノラ

「ふふ……なんだ、あの……ほれ。

おっさん、あの娼館に顔を出してるみたいだしよ！

へへ、オレが……店に、並んだらよ？ 指名ってやつ……してくれよな！

お世話になった分、いっぱい、いっぱい……サービス、するからさ！

……ひひひっ♪ 色々教わって、おっさんが良い女だって、生唾飲み込んで驚くぐらいになってるかもしれねえしな？

は、はは……♪」

笑う、笑う、ノラが笑う。

涙はもう止まり、明るい声であるはずなのに。

笑いながら、彼女が……泣いている。

《……ぎゅっ！》

（再び、強く抱きしめる音）

ノラ

「おっさん？

な、なんだよ……どうかしたのか？」

どうしようもないと、迷惑をかけられないと……全てを諦めようとして  
いるその姿に、貴方の迷っていた心が一つに定まるのを感じた。

視線を、ちらりと部屋の奥へと向ける。そこには彼女にも触らせないよ  
うにしていた次の装備を買う資金にすべく溜め込んでいたアイテムが詰  
まっている。

時に命の危険にあいながらも、冒険者としてより上を目指す。そのため  
に貯めていたといって過言ではないモノではある。……あるのだが。

全てを売り払えば、それなりの。”新人の娼婦“を一人買い上げるぐら  
いには”なる金額になるモノ達である。

一度だけ大きく、貴方は息を吐き出した。

頭の中にあったこれから先の未来の予定を、全て吐息と共に白紙にしな  
がら、ノラに顔をゆつくりと向ける。

【もうちよつとだけ、この部屋にいてくれ。

……少しの間だけでいい。この件を、自分に預けて欲しいんだ】

と、貴方は優しく彼女に声をかけた。

ノラ

「え……おっさん？ 何言って……？」

《ぎっ……》

（立ち上がる音）

《こつ、こつ、こつ》

(ゆつくりと歩く音)

【良いから。恩を感じてるなら少しの間だけで良い、信じてくれ】

と、ノラの問いを流しながら貴方は部屋の奥へと向かい、そして何重にも封をしていたソレを……ゆつくりと開ける。

《がちや……がちや、がちや、がちや》

(鍵を幾つも開ける音)

《きいいい……》

(扉が、ゆつくりと開く音)